

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2670900618		
法人名	社会福祉法人 京都老人福祉協会		
事業所名	グループホーム 醍醐の家ほっこり あさひユニット		
所在地	京都府京都市醍醐南里町30-1		
自己評価作成日	平成22年11月27日	評価結果市町村受理日	平成23年1月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://kohvo.kyoshakyo.or.jp/kai gosip/infomationPublic.do?JCD=2670900618&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社団法人京都ボランティア協会
所在地	京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル梅湊町83-1 ひと・まち交流館京都 1F
訪問調査日	2010年12月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者の方々の力を自然な形で引き出せるような声かけを心掛け、家事など、利用者とスタッフと“共”に行っている。業務優先にせず、その人のペースやその時の気持ちを大切にしながら、日々の生活を送ってもらっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

京都市南部、宇治市と接した醍醐寺近くに新築された事業所で、建物内にはグループホーム、小規模多機能型居宅介護事業所、デイサービス、認知症対応型デイサービス、居宅介護支援事業所の5事業所が併設されている。新築の洋風建物ではあるが、ホーム内は種々の工夫により、落ち着いたやわらかい空間となっている。地域との関係は良好であり、家族の面会も多く、年4回の家族会兼行事の際には大勢が来訪し、運営協力もある。職員は法人の的確な研修態勢により育てられ、チームワークよく業務に励んでいる。開設以来8年半が経過し、日常生活の食事、入浴、排泄、外出等のケアは良くなされており、利用者が自分らしい暮らしを楽しんでいること、看取りに取り組んでいること、利用者の希望により泊旅行が実現していること等、成熟したグループホームの様相を呈している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	着任研修や年間研修計画の中で、振り返りや学びの場を設けている。また、玄関や職員研修室に掲示して、繰り返し見るように取り組んでいる。D22	法人の理念を踏まえて職員みんなで開設時に考えた理念は「ゆったりよりそい、ひだまりのような」である。パンフレットに明記し、ホーム内には玄関、スタッフ室等に掲げている。家族には契約時に説明し、地域には運営推進会議で理解を図っている。①利用者との関係において職員が馴れ合いにならないように、②日常生活のなかで利用者にもっとしたいことをしてもらい、の2点を今年度の目標としている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の自治会から呼びかけがあり、学区運動会や地蔵盆などの行事に利用者が参加可能な事には参加している。	学区運動会や町内の地蔵盆に利用者とともに参加している。利用者の買物のために近くのスーパーへ出かけたり、保育園の園児を見に行ったりしている。音楽ボランティアが月2回来訪し、利用者の楽しみである。小学生が年2回来訪し、利用者との交流してくれる。大学生の実習を受け入れている。夏祭りには地域の人も参加し、踊りのボランティアもくる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所内にある小規模多機能型居宅介護や一般 認知症デイサービスや居宅との連携により、氣息の高齢者のみならず、若年認知症への支援も考え相談を受けることがある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議の中から新たな取り組み(例えば避難訓練に町内の人に参加していただいたり、家族会とともに研修会を開催したりしている。)	要綱を作成し、家族、町内会役員、民生委員、老人会役員、地域包括支援センター職員等がメンバーとなり、隔月に開催され、記録が残されている。地域の福祉情報の交換が行われている。メンバーには昼食を試食してもらったり、夏祭りなどの行事にも参加してもらっている。消防訓練の際には参加するという申し出がある。	運営推進会議の内容を豊かにするために、近くのスーパー店長、小学校の校長先生やPTAの役員、消防署、警察等の方々にゲストメンバーとして参加してもらってはどうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	京都市、担当福祉事務所との連絡を必要時行っている。	困難事例は伏見区に相談している。市老協の地域密着型事業所連絡会に参加し、そこには京都市からの参加もあり、情報交換等をしている。グループホーム部会では相互に見学をしており、学ぶことが多い。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在一名、転倒防止の為に、家族の承諾書を得てセンサーマットをベッドに休んでおられる時だけ使用している。身体は拘束をなくせるように取り組んでいきたい。他の方については、安全確保の方法を工夫して身体拘束しないようにしている。	「身体拘束をしません」という方針を掲げ、契約書に明記している。マニュアルを作成し、職員研修は法人で実施され、受講した職員が伝達研修している。現在1人の利用者に拘束があり、家族の同意書をとっている。玄関ドア、エレベーター、ユニットのドア等は施錠されていない。	やむを得ず身体拘束を実施する場合は、期間を限定し、経過記録を残すことが望まれる。非常口も日中は施錠しないことが求められる。

京都府 グループホーム 醍醐の家ほっこり あさひユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待については外部研修に参加して、注意や防止に努めている。事業所内研修などで学ぶ機会を持ち、さらに全職員に徹底していきたい。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会に参加する事もあり、必要な方には適応している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	運営規定 重要事項説明書 入居契約書に沿って説明し理解していただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や家族会で利用者、家族の要望や意見を表せる機会を設け、運営に反映させるように努めている。	家族の面会は比較的多く、その際に情報交換している。利用者への介助に関して家族から意見があり、職員が話し合い、なるべく利用者ができることは利用者自身にしてみらうという考え方を家族に話し、共通理解ができた。開設記念日、夏祭り、敬老会、新年会の年4回の行事には家族会を兼ねて実施しており、13家族以上の参加がある。認知症やグループホームについて、施設長がパワーポイントを用いて話し、理解を図っている。写真の多い広報誌は年4回発行されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議 全体会議で行っている。	職員会議において職員は活発に意見交換している。ある利用者が娘を亡くしており、思いが深く仏壇が持ち込まれているので、命日には仏花と線香をたて、拜んではどうかという提案があり、取り上げて実行している。職員は研修受講や異動などの希望を述べている。毎年話し合いにより個々の職員は目標を定めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	実行している。		

京都府 グループホーム 醍醐の家ほっこり あさひユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者やリーダー職員等が、区役所介護保険課主催の地域連絡会議に出席できるようにしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用に至るまでの面接は自宅等へケアマネジャーと一般職員が出向く。また施設見学や体験入所もしていただき、その折々に相談を受け、利用に対しての不安を受け止め、一緒に解決していく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用に至るまでの面接は自宅等へケアマネジャーと一般職員が出向く。また施設見学もしていただき、その折々に相談を受け、利用に対しての不安を受け止め、一緒に解決していく。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅ケアマネジャーとの相談を密にすることで、必要なサービス提供を行う。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共に生活する事を築くために、センター方式のアセスメントシートを活用し、本人のこれまでの生活を知り得意なこと・望むことを基本に支え合う関係作りをしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会を作り、その時に家族を含めた行事を計画して定期的に参加を呼びかける。家族が来所しやすいように、面会時間の制限は大きくはない。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みのある場所や地元のお祭りへの参加支援、知人の面会などへの配慮を行っている。又、センター方式を見直し、関係継続の支援に努めている。	祇園祭の町内に住んでいた利用者を毎年祇園祭りに連れて行き、喜ばれている。俳句の先生だった利用者に弟子が再々来訪し、話が弾んでいる。他の施設に入所している夫のもとに同行したり、小規模多機能型居宅介護事業所を利用して馴染みになった職員に会いに行く利用者を支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	趣味や共通の話題がある方々には、関係が続くように支援している。		

京都府 グループホーム 醍醐の家ほっこり あさひユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院された時には、お見舞いに利用者とともにいたり、家族が高齢で定期的な訪問が不可能な時は職員で行くことにしている。特別養護老人ホームへ入所されても、時々面会に行く。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人、家族からの希望の聴取を大切に、機会を設けて見直しする。	契約が決まると訪問面接し、医療情報、介護サービス利用情報、家族構成等をフェイスシートに残している。利用が始まって観察の結果等を踏まえてセンター方式でアセスメントシートを記入している。交通局に勤務、風呂屋の番台に座っていた、専業主婦だったので家事万端が堪能、旅行が好き等の生活歴や趣味・嗜好の情報が記録に残されている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	初回面接(自宅)とセンター方式を活用して行うとともに、在宅ケアマネージャーとの連絡も行い把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	起床から就寝まで、利用者のペースで個人に応じて支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケア担当とケアマネージャーが中心となり、本人、家族の意見やアイデアを大切に介護計画を作成している。又、毎月のユニット会議でもモニタリングを行い状態に変化があった時、随時対応している。	ケアマネージャーと担当職員が利用者や家族の意向を踏まえて介護計画を作成している。介護計画は身体介護の項目が多いが、馴染みの人との交流なども入れた個別で具体的なものとなっている。毎月カンファレンス会議をしており、介護計画の見直しは状態変化がない場合、半年後に行っている。ケース記録は介護計画の項目にしたがって書いているが、介護を実施したかどうかだけの記録である。	介護計画にはアセスメントで把握した情報を反映し、焦点化したものにする、介護計画の評価は項目ごとに毎月実施すること、ケース記録には介護計画の項目ごとに介護を実施したかどうか、実施した際の利用者の表情や発言、実施できなかったときにはその考察等を記録することが求められる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	実行している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時の状況やニーズに対応し、柔軟な支援やサービスに取り組んでいる。		

京都府 グループホーム 醍醐の家ほっこり あさひユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在交流を持っているのは、地域小学校 中学校 民生委員 ボランティア 消防 社会福祉協議会である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	自宅におられた時の主治医を持たれる方、入院の必要性がある時にはこの病院など、家族の希望を大切に、嘱託医とその診療所や病院が連携できるように事業所が支援している。	従来のかかりつけ医への定期受診には家族が同行しており、情報交換している。グループホームの協力医が隔週に往診してくれ、ほとんどの利用者は利用している。歯科医の往診もある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	嘱託医の看護師や、事業所内看護師など相談しながら健康管理を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくり	面会時や緊急を要する時には電話連絡をして情報交換や相談に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナルの意向書作成、重度化した時の対応など、家族、主治医、職員とで繰り返し話し合いを持ち方針の共有化を図っている。又、できる医療は限られており、家族に説明を行い了解を得て、ケアを行っている。	当グループホームの「看取りに関する指針」を明文化し、マニュアルを作成し、職員研修を実施している。医師、看護師の24時間協力体制があり、家族からは意向確認書ももらっている。昨年度1人の利用者を看取っており、その経過を記録に残し、今後への課題も検討されている。職員には大きな学びになっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に行っているのは、年に一回の事業所の取り組みとして普通救命講習を地域管轄の消防署から、受講しているが、定期的には職員個人で行ってもらっているために、事業所として対処していきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回入居者を含め、地域町内会の方とともに、管轄消防と避難訓練をしている。日頃から訓練をするようにシステム化し、地域の人々にも協力が得られるように働きかけている。	火災については消火器、感知器、通報機、スプリンクラー、防火管理者等が設置されている。避難訓練は夜間想定も含めて年2回実施し、消防署や地域の人の参加もある。	当グループホームは2階であり、利用者をどのように非常階段等を使って避難させるのか、の訓練を実施すること、備蓄を準備することが望まれる。

京都府 グループホーム 醍醐の家ほっこり あさひユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は個人情報の保護の誓約書を入職時に記入する。また、時々において人権を守ることにについて、ケア会議に入れ込んで意識を高めるようにする。	トイレや居室は中から鍵をかけることができる。個人情報保護規程に関して家族の同意があり、職員は誓約書を書いている。トイレ誘導の声かけは十分注意している。利用者との会話で職員は馴れ合いにならないように、気をつけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己表現ができるように聞く姿勢をとることにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ある程度のスケジュールはあるが、その時々々の状態や様子を把握しながら気持ちを尊重して支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人に着用する衣服を選んでもらったり、個々の身だしなみに必要な物を一緒に買いに行ったりして支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立から、買い物、食事作り、後片付けは利用者とともにしている。	利用者の希望を聞きながら、1週間分の献立を立て、スーパーに食材を注文して配達してもらっている。野菜を切ったり、豆の皮をむいたり、下膳、食器洗い等ができる利用者と一緒に職員が行っている。オープンキッチンであり、利用者と話しながらできる。ホットプレートでお好み焼きしたり、新年会では利用者の強い希望により力にすきをしたりする。和風の食べ慣れた献立である。職員も共に食べながら会話が弾んでいる。食事摂取量と水分摂取量は記録に残している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎回の食事量や水分量をチェックすることによって、一日の必要量を摂取していただくようにしている。また、食事形態はその方に合わせて提供している。夕食は栄養士の献立で提供している。昼食はそのバランスを考えた献立をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時、就寝時は毎日行っている。		

京都府 グループホーム 醍醐の家ほっこり あさひユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	快適に過ごしていただけるよう紙パンツの使用を減らし、布パンツ、パット等の対応や排泄リズムを把握し、トイレで排泄できるよう支援している。	なるべくトイレでの排泄という方針のもと、排泄パターン表によりトイレ誘導をしている。老健ではリハパンとパットを使用していた利用者が入居後トイレでの排泄が可能になるなどの改善例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分補給 牛乳 ヨーグルト 食物繊維が多い食事の提供を行い、散歩や家事を毎日行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	可能な限り本人の希望にあわせられるよう実行している。	窓からの光が入り、少し広めの浴室である。週に3回を目標にしており、希望があれば毎日の入浴も支援している。マンツーマンの同性介助である。ゆず湯やしょうぶ湯も楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ソファーや居室を利用して、その時々に応じて休憩していただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の内容書きを、職員がすぐに確認できるところに置いている。内容を確認して与薬し、効果や副作用の有無に注意し対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	役割は、食事関係、洗濯物たたみ、習字、掃除など、楽しみ事は手芸、歌、サークル活動の参加、散歩などその方が好むことや得意なことを提供している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	店への買い物、散歩、急なお出かけなど対処できている。	ふだんは近くのスーパーへ買いたい物を買いに出かけたり、近くの保育園で子どもたちの様子を見たり、お餅つきをしているのを見たりするのが楽しみである。桃山城での花見、近くの道のあじさい見物、天瀬ダムでの紅葉狩り、折上神社で甘酒をいただきながらの初詣、随心院や醍醐寺での梅見など、季節を感じる外出をしている。利用者の希望により、その時々に行きたい所へ行く個別外出をしている。	

京都府 グループホーム 醍醐の家ほっこり あさひユニット

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	常時持っておられる方は無く、金庫で預かり、レクレーションに出かける時には、買い物用に個人にお金を持ってもらい使っていただく。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	支援している		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間には、ソファやテレビを置いている。季節の飾りつけを行う。不快な音はしないように、(テレビが不快になる事もあることを考慮)注意している。眩しいほどの日差しはなく、緑を介してできるようになっている。	テレビの音や職員の声の大きさに注意している。居間は和紙のシェードをつけた蛍光灯であり、やわらかい光となっている。西日の入る窓はカーテンやブラインドで調節している。温湿度計や加湿器を設置して配慮している。居間の壁には絵や書の額、タピストリーがかかり、花の鉢がおいてある。きれいな布カバーをかけた和風鏡台や本棚、ソファのクッションも落ち着いた色調である。中庭には緑が茂り、自然光が入る。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	独りになりたい時はソファに移ってゆっくり過ごすなど、思い思いに過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内はこちらからのお仕着せ家具調度ではなく、使い慣れたものを持って来ていただいている。事情により持ち込みが不可能な方には、馴染まれるような物を相談の上購入をお願いし、職員側でも購入のお手伝いをする。	ドアにはそれぞれ異なる柄の布製の暖簾をかけ、雰囲気を柔らかくしている。居室は畳で、ふとんを敷いたり、ベッドを置いたりしている。2~3の押入れが備え付けられている。整理タンス、本棚、椅子、机等を持ち込み、博多人形のケース、ぬいぐるみ、置時計などを置いている。壁には亡夫の写真の額、自身の白寿の祝いの色紙等を飾っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全に安心して過ごせるように必要に応じて手すりを付けたり、居室のレイアウトを変えたりして対応している。		